

火星



平成20年5月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

つちくれに日なた日かげや蜨蝶

摩羅石の前でたたみし春日傘

陽炎にぶつかつてゆくトラクタ i

猪垣にうちそとのあり花明り

鶯のふぐり山へと移りけり
雨中りせし雪柳ながし目に
早退けの子の影ゆきし花なづな
鉄橋の列車待ちある朧かな
鳥声のはたと止みたる金鳳花
首やはらかく六月の山にある

太白星

柳生千枝子

節分の声の高らかなりし父
貝殻をまた濡らし引く春の波
紅いろの貝殻拾ふ娘の宝
春の雲沖の遙かを動きゆく
早春の声ひびかせて何の鳥
目覚め佳し早春の陽のいる動き
鈴蘭の苗を貰ひし朝の雲

杉浦典子

寒椿巖の裂け目祀らるる
鳥曇ムンクは赤き空描き

涅槃会の鳶が大きく空つかふ
座禅草見てきし雪のきしみけり
湖の魚食うべ臙となりにけり
表札に十の名雪解雫して
雪を被て桜大樹の紅させる

浜口高子

立春や袋はみ出る生一本
六地藏でこぼこ在す梅の風
ひと潮に平らとなりし馬刀の穴
雪解や吊玉葱の皮落つる
湧水を青竹に受くおぼろかな
雛の日のひとりのさかな焦がしけり
滔滔のしぶきのかかる露の臺

火星作品

山尾玉藻選

立春の風来て瑞枝零せり
八幡 大山文子
月赤く残る寒さを上りけり
産院のしづかに暮るる牡丹の芽
冴返る花屋の床の葉屑かな
せきれいの再び触れし雪解川
姫路 高尾豊子
水仙の芽が出て嬰の風邪もらふ
父の忌や冬の梅花藻ふたつみつ
真つ新たな雪を散らせり鳥の恋
鳥交む近江の空の崩れぐせ
出張の能登にのぞきし雛の店
湯の川に卵沈める斑雪
宝塚 河崎尚子
乙訓の芹つみに出る春北風
堂守が焚火踏み消す雪間かな

太鼓打つまつ毛に載りし牡丹雪
竹藪に雪けむり立つ雨水かな
寒戻る水湧く村の屋敷神
春浅き島に展がる醬の香
街道の雪間にひろふ鳥の羽根
凍どけの川端を青菜流れ出づ
水底に波の影あり冴返る
饗庭野の雪間のありて座禅草
引く鴨に傘をさす人ささぬ人
フロントに葉書を託す春の雪
寒もどりけり水煙の空の青
春泥のゴム長ばかり葬の家
雪解川村に夕べの鐘が鳴る
家々の淡海に向ける種選
水のの上に松の枝張る卒業歌
残雪やかすれがちなる鶴のこゑ
白鳥にすぐ疎まるる顔なりし

明石 戸栗末廣

八幡 丸山照子

宝塚 高松由利子

選のあとに

山尾 玉藻

せきれいの再び触れし雪解川

大山 文子

我々人間が生きてゆく上で水は必要不可欠であり、身近に水の気配を感じるだけで安らぎを覚える。「鶺鴒」もまた水辺近くに生息する鳥である。我々が「鶺鴒」の姿や声に嬉しさを覚えるのは、「鶺鴒」に水を意識する所為かも知れない。また、鳩や雀のように害鳥となることもなく、四季を通して人間と「鶺鴒」とは付かず離れず良い関り方をしているようだ。恐らく、春を待ちわびる思いにしても、人間も「鶺鴒」も変わりはないであろう。せきれいの再び触れし」の躍動は、早春を迎える我々のこころの躍動そのものなのである。尚、その喜びを強調する為に「再び」の修飾語は欠くことはできない。同時発表作「立春の風来て瑞枝雫せり」では、誠に「立春」らしい瑞々しく張りのある景を切り取っている。

父の忌や冬の梅花藻ふたつみつ

高尾 豊子

本来「梅花藻」は夏に可愛らしい花を咲かせる水生植物である。しかし、先日吟行で訪れた針江の湧き水は年中水温が一定で、冬でも小花をほつと咲かせていた。「冬の梅花藻」を「ふたつみつ」と数えている内に、作者はふと「父の忌」に近いことを思い出したのである。直感のたまもの、絶妙の取り合わせとなった。

引く鴨に傘をさす人ささぬ人

丸山 照子

水を押し水を上がらず春の鴨

大東由美子

対岸のたちまち暗む春の鴨

松山 直美

「春愁」という季語があるが、北へ旅立つ頃の鴨や帰らず仕舞いの鴨を眺めていると、誰しも感慨深くなるものである。

一句目、「傘をさす人」も「ささぬ人」も、長旅をせねばならぬ鴨の身を思い、慈しみと励ましの思いを胸に佇んでいるのである。濡れるほどでもない春の雨がそう感じさせる。

二句目、鴨の本当の気持は知らないが、人の眼には淋しげに映るのが「春の鴨」であろう。そんな思いが「水を押し水を上がらず」と捉えた。翳りある景で読む者を納得させる。

三句目、「対岸のたちまち暗む」と早春の定まり難い天候を描いて、「春の鴨」への憐憫の情を言外に述べている。

水の上に松の枝張る卒業歌

戸栗 末廣

ころがもの。に至る表現体系をとった俳句は、実に大きな力を発揮するものである。ものが密度をもつて有機的に働いてくるからである。

「水の上に」張る枝が「松」以外の木の枝であっても成立するであろうか。「卒業歌」とは、莊嚴にもさまざま深い思いを湛えてひびくものである。すると、「水の上に」張るのは必然的に「松の枝」でなくてはならない。もののみでこころを存分に伝える句である。率直でけれんの無さもよい。

(以下略)

恒星圈

吉田島江

一年のうちの一よ日寒堆肥
花な柄や讚美歌遠く始まりぬ
高々と冬の樹武蔵生誕地
夕近き風のさはりし針供養
山笑ふケープル下のけもの径

山田美恵子

吉田康子

写譜のまづト音記号よ亀の鳴く
無口なる夫のうぐひす餅の口
雪降り降るうどんに大き油揚
雪のせし車の着きぬ花舗の前
園児劇の紙のきららやぼたん雪

水仙忌近づく今朝の根深汁
盆梅展しづかに混んで来たりけり
針祭坂のかかりに雪のあり
雉子笛や又平衛さんの背山より
朧夜の双塔に影ありにけり

山本耀子

米澤光子

藁苞の中の赤き芽寒戻る
語部と歩く半日雪解光
漬樽の薄黴に寒もどりけり
観梅やきれいだころがベンツより
引鴨に湖の雪ぐも切れにけり

追儼に行きそびれたる梅茶漬
なやらひの裸電球鬼照らす
突くほどに膨らむ母の紙風船
はまぐりのことりことりと遊ぶかな
マネキンを男が運ぶ春の雪

獅子座

山尾玉藻推薦

松山直美

比良山の雪より雲の湧きあがり
如月や藻の上奔る比良の水
家毎に比良の湧き水春夕べ
段畑に人影のあり春めける

伊勢きみこ

水仙のうつむいてゐる自己主張
飛火野の野守も出でよわらび摘
亀鳴くやてんてん買ひに西陣へ
紙風船若き畏友のこつと逝く

西畑敦子

ぼろ市に買ひし雛を飾りけり
通天閣の電飾見ゆる雛の間
座禅草くはしく見たかと問はれけり
屋上の小さきチャペル鳥帰る

松井倫子

雛飾る髪の白さを託ちゐて
松の木に爪研ぐ猫や雪解風
三毛猫の垣根くぐり来菊根分
井戸蓋の開いてゐる日や亀の鳴く

森茂子

風光る指しなやかに太極拳
桃の日の鳥籠に鳥よつて来し
斑雪白布巻かれし墓一基
鴨たてば目白すぐくる針祭

緒方佳子

くれなゐの紙に包まれ初諸子
引出しに金平糖や入学す
着ぶくれて淡海の端に立ちてをり
福豆を食みゐる鬼の肉襦袢

岩井ひろこ

梅見には少し間のある月詣
身ほとりに血圧日誌冴返る
立春のスカート売場に戻りきし
春寒や獣の匂ふ奈良小径